共感性尺度の得点と共感対象選択の関連

○中妻拓也¹・サトウタツヤ²
(¹立命館大学大学院文学研究科・²立命館大学文学部)
キーワード：共感、共感対象、インタビュー

Relation to score of empathic scale and selection of empathy objects.
Takuya NAKATSUMA¹, Tatsuya SATO²
(¹Graduate School of letters, Ritsumeikan University., ² College of Letters, Ritsumeikan University.)
Key Words: Empathy, Empathy subject, Interview

問 題

これまでの共感研究は共感する人間の特性に注目され検討がなされてきた(Davis,1994; Hoffman,2000)。しかし、共感の際には共感対象が必要であり、近親者ではない複数の人物がいた際、誰に共感するかといった研究は見受けられない。

目 的

本研究では、3人の人物が社会的に容認されづらいと考えられる行動を起こした事例を呈示した際の共感する対象や程度に関連と共感性尺度の合計得点との関連を検討することを目的とした。共感性の程度（全体得点による高群・中群・低群）によって事例における共感する対象や程度、見方に違いがあると仮定した。

方 法

質問紙調査、インタビュー調査を行った。調査対象者は質問紙調査ではK大学の大学生79名（男性:44名 女性:35名 平均年齢:21.2 SD:7.18）、インタビュー調査はインタビューに協力してくれる意思を示したK大学の大学生12名（男性3名、女性9名 平均年齢:20.3歳 SD:1.22）であった。

質問紙は中妻・板山・桐生(2009)が作成した共感性尺度(4件法,14項目)をK大学の講義前に配布し、回答してもらった。その際、インタビュー調査の協力依頼を質問紙の最後に添付し、メールにおいて協力意思を示した質問紙の回答者をインタビュー調査の調査対象者とした。

インタビュー調査では半構造化面接の形式をとり、調査対象者の承諾を得て、ICレコーダーでの録音を行った。

インタビューでは、まず問題事例を呈示し、誰に共感したか、どこに共感したか、どうすればより平和的な解決が図れたかなどの質問を行った。

問題事例はA、B、Cの三者関係を想定し、CがAと交際していたがBに対し二股をかけ、BがCと別れた後にCにストーカー行為を行い、それを知ったAがBを暴行するという内容のシナリオを作成した。シナリオはK大学大学院の人間行動学専攻の大学院生2名とK大学人間科学部教員1名により内容、語彙の検討を行い、作成した。

インタビュー内容:

基礎項目では①名前、②年齢、③性別、④出身地、⑤家族構成を聞いた。

聞き取りは①「この事例の中で、誰に共感しましたか?」、②「共感した人物のどこいったところに共感しましたか?」、③「この時共感した人物はどんな気持ちだったと思いますか?」、④「どうすればより安全に事態が解決したと思いますか?」、の内容で聞き取り調査を行った。インタビュー調査場所はK大学のグループワークルームで、所要時間は10～15分程度であった。

結 果

79名の質問紙のデータを共感性尺度合計得点の累積パーセント〔高群・中群・低群〕で分類し、問題事例での共感対象〔A、B、C、×（共感対象無し）〕との関連を検討した(Table1)。

Table1 共感性尺度の合計得点による共感対象

氏名（アルファベット表記）	性別	共感性尺度得点	事例における共感対象
1	A・I	女性 48点（高群）	A
2	K・M	男性 46点（高群）	A
3	M・K	男性 45点（高群）	A
4	M・I	女性 44点（高群）	A
5	H・I	女性 53点（高群）	B
6	M・M	女性 44点（高群）	B
7	N・I	女性 38点（中群）	B
8	Y・Y	女性 37点（中群）	B
9	A・M	男性 38点（中群）	C
10	M・Y	女性 28点（低群）	C
11	A・U	女性 36点（低群）	×（なし）
12	E・I	女性 32点（低群）	×（なし）

検討の結果、共感性尺度合計得点の高群・中群・低群によって共感対象〔A、B、C、×〕が分かれるという結果になった。これは仮説を一部肯定する結果となった。

考 察

今回の調査の結果、共感性尺度合計得点の高群・中群・低群により、共感対象が分かれるという結果になった。(Table1)。

本調査で用いた尺度は、「被影響性認識」、「対象共感意識」、「物語志向性」の3要因からなる。共感性尺度の合計得点が高群の調査対象者はすべての因子において得点が高く、中群、低群は何かの因子の得点が低い、もしくは全体的に高群よりも得点が低いと考えられる。このことより、合計得点の中には3因子それぞれの得点のバランスが存在すると予想され、このバランスによって共感の様相が変わってくると考えられる。これに伴い、共感する対象が変わると考えられる。

今後は、各因子と共感対象の関連についての検討を行う必要がある。また、本調査では男女比が揃っておらず、今後は男女比をそろえ、性別での共感の感じ方の違いに関しての検討が必要となろう。

引用文献

中妻拓也・板山昂・桐生正幸（2009）. 犯罪への許容や親和を捉えるための共感性尺度の作成と検討, 犯罪心理学研究 47（特別号）, 66-67
Davis, M. H. (1994) Empathy: A Social Psychological Approach, Westview Press.
Hoffman, M. L. (2000). Empathy and Moral Development: Implications for Caring and Justice, Cambridge University Press.